海外移民の文化変容態度と文化的アイデンティティ研究にみる在日コリアン研究への示唆（2）：二文化への態度と新たな生き方をめぐって

Implications for Zainichi Korean Research from a Review of Acculturation Attitudes and Cultural Identity in Overseas Immigrants（2）：Concerning Attitudes toward a Bicultural Environment and a New Lifestyle

李　正姫・田中共子
LEE, Jung-hui & TANAKA, Tomoko

1．はじめに

1.1　本研究におけるアイデンティティの定義

本稿では，在日コリアンのアイデンティティ，特に文化的アイデンティティに関する展望を行う。海外においては文化間移行者の心理学的研究は多くみられるものの，在日コリアンを対象とした心理学的な知見は乏しいため，在日コリアンのアイデンティティ研究についても，主に社会学・教育心理学などの周辺領域の先行研究や，在日コリアンに限らず他の在日外国人における先行研究を適宜含めて概観していく。

アイデンティティは，発達心理学の領域では総じて内面的な自己概念を意味している。しかし本研究では，内面に限定せずに扱いたいと考えている。なぜなら，異文化間心理学においては，民族的アイデンティティ（ethnic identity），ないしは文化的アイデンティティといった，社会的な側面をより反映したアイデンティティが重要視されているためである。本稿では文化間移行者のアイデンティティについて，出身集団やその集団の文化に関わるアイデンティティを「エスニックアイデンティティ」と称する。滞在先の社会や集団，そこの文化に関わるアイデンティティについては，「ナショナルアイデンティティ」として包括的にとらえる。さらに両アイデンティティをまとめる用語として，「文化的アイデンティティ」を想定する。

アメリカの心理学者であるマツモト（2001）は文化を，目に見える人種や国籍のような客観的な要素と，価値観や態度のような目に見えない主観的要素の二つに，分けて考えられるという。本稿では，人種や国籍という集団カテゴリによって，考え方や感じ方が異なってくるという現象を取り上げていくことから，客観的な要素と主観的な要素を含めて「文化」の範囲としてみておく。

以上を前提として，以下に在日コリアン研究に関わるアイデンティティの概念について，整理していく。

2．文化的アイデンティティ

2.1　在日コリアンにおける文化間移行の背景

日本の社会学や教育文化人類学の研究においては，在日コリアンに関して，以下のような記述がみられる。福岡（1993）は，在日コリアン150人あまりを対象に聞き取り調査を行って，今の在日コリアンが日本に定住するようになった背景をまとめた。第二次世界大戦中に強制連行という形で日本に連れて来られた大部分の人は母国に帰り，自分の意思で仕事を求めて渡日した人々は敗戦後にも日本に在留することを選択した。その結果，およそ50万～60万人の朝鮮人が残ったという。谷（2002）は，その論考において，1970年代から1980年代にかけての時代に，在日韓国・朝鮮人の「法的地位の面」や「社会保険の面」が明確にされていき，意識面での定住傾向を強めてきたという。そして在日朝鮮人は，日本の外国人移民の中で，定住の期間がもっとも長い70年以上の歴史があると述べている。教育文化人類学者の原尻（1989）は，在日韓国・朝鮮人を日本への移民とみて，少数者として生きていく者としてとらえている。

海外の移民研究では，仕事を求めて他国に移民する場合の報告がしばしばみられ（Viruell-Fuentes, 2007），仕事は文化間移行の大きな動機の一つとみられる。大西（2001）によれば，一時滞在者から定住者への変化は，日系アメリカ人やトルコ系ドイツ人などを含め，世界中の移民に見られる現象である。たとえばViruell-Fuentes（2007）は，在米メキシコ移民を対象に，インタビュー調査を用いた心理学的研究を行っており，調査対象者たちについては，始めは出稼ぎでアメリカに渡っていったものの，その後定着して暮らすようになったと記している。

2.2　在日コリアンにおける二文化への態度

在日コリアンは，韓国・朝鮮のルーツを持ちながら，日本の社会文化的環境で生活してきた人々である。その二文化への態度についての報告をみていきたいが，在日コリアンを対象とした二文化への態度に関する心理学的な研究は乏しい。関連研究として，社会学的な「在日コリアンのアイデンティティ研究」ならば，見つけることができる。

海外においては，文化間移行者の二文化への態度に関する心理学的研究の主題として，文化変容，ないしはホスト集団や社会へのアイデンティティやエスニックアイデンティティの問題が探求されてきた。ただし文化変容とアイデンティティという用語は，あまり明確に区分されないまま使われている。移民研究で知られるカナダの社会心理学者Berry（1980）は，同化圧が高い社会ではcultural identityは守りにくいが，かといって簡単に放棄するのは移民側には難しいと述べている。このcultural identityは，出身集団の文化に関するアイデンティティを意味している。本稿では「エスニックアイデンティティ」として定義される。

こうした研究の背景としては，元々持っていたアイデンティティを，放棄したくはないが守りにくいという葛藤状態がある場合，その保持が移民研究における重要な研究テーマとして浮かび上がった

ものと推測される。問題となる程度は，受けいれ社会の同化圧がどれだけ強いかで説明される可能性があろう。

2.3　エスニックアイデンティティに関する用語の整理

「エスニックアイデンティティ」を，本稿では「出身集団に由来するアイデンティティ」として定義している。この言葉の使われ方は日本では必ずしも一貫していないうえ，総じて日本の用例は，海外の心理学的な移民研究における用例とは，総じて異なっている。以下に用語の使われ方を，整理しておきたい。

日本の研究者は，「出身集団に由来するアイデンティティ」を多様な用語で記する傾向がある。社会学者の林（2001）は「民族意識を表わす表現」として，「民族的アイデンティティ（エスニックアイデンティティ）」と書いたり，「エスニシティ」と書いたりしている。いずれも出身集団のアイデンティティを指しており，本稿の定義するエスニックアイデンティティが様々に書かれているとみなせる。

在日コリアン研究ではないが，異文化滞在者の心理学的研究を展望した大西（2001）では，「文化的アイデンティティ・民族的アイデンティティ・エスニシティ・国民アイデンティティ」は多様な概念だとした上で，使い分けを主張する立場も互換可能だと主張する立場もあると記している。全てを総括するものが「文化的アイデンティティ」とみなし，多文化集団における文化的少数派が多数派との関わりの中で形成する様相として，とらえている。この「文化的アイデンティティ」は，民族的マイノリティの持つアイデンティティのことを指している。そして「文化的アイデンティティ・民族的アイデンティティ・エスニシティ・国民アイデンティティ」の４通りのアイデンティティは，すべて出身集団へのアイデンティティを指し，本稿の「エスニックアイデンティティ」に該当している。

海外の心理学的な研究との使い方の違いは，以下の二点にまとめられる。第一に，海外では，文化的アイデンティティ（cultural identity）は，エスニック集団（出身集団）のアイデンティティと，ホスト社会（住んでいる社会，滞在先の社会）へのアイデンティティを総括した意味で使われている（Berry & Sabatier, 2010）。しかし日本で「文化的アイデンティティ」といえば，大西（2001）のように，マイノリティが自集団に持つアイデンティティしか含まれない。

第二に，国民アイデンティティ（national identity）は，海外ではホスト社会ないしはホスト文化へのアイデンティティの意味で用いられている（Ting-Toomey, Yee-Jung, Shapiro, Garcia, Wright & Oetzel, 2000；Berryら, 2010）。しかし日本では，逆にエスニック集団へのアイデンティティを指している用例がみられる。在日本大韓民国青年会　（2009）では，在日韓国人のインタビューを紹介している。そこでは，朝鮮民族の誇りをもって生きよという指導を強要ととらえ，ナショナルアイデンティティの問題はその人自身の問題だ，と反論する語りが紹介されている。文脈から考えて，コリアンとしてのアイデンティティを指しているとみなせる。

出身地域で育んだ民族的な自覚をナショナリズムととらえる用例が，心理学領域の研究である植松(2010)に見られる。調査対象者は海外に短期間滞在する，日本人留学生である。民族アイデンティティ，自我アイデンティティと留学生の異文化適応感の間の関係を調べたところ，「民族アイデンティティ愛着・所属感」の因子と，「自我アイデンティティ」との間に，有意な負の相関が見られたという。そして過度なナショナリズムや自民族中心性を持つと，自我アイデンティティが不安定になると考察している。

海外の心理学的な研究においては，滞在先へのアイデンティティを「ナショナルアイデンティティ」と呼ぶ。一方で過去の日本の研究では，滞在先ではなくルーツに伴うアイデンティティや，自分の民族的な感覚に関わるアイデンティティを，「ナショナルアイデンティティ」と捉えている。日本の研究にみられる「ナショナルアイデンティティ」は，本稿が出身集団へのアイデンティティとして定義した「エスニックアイデンティティ」と，同義であろう。つまり過去の日本の研究では，ナショナルアイデンティティとエスニックアイデンティティは，同じに扱われてしまっていると判断できる。

本稿では，「文化的アイデンティティ，ナショナル（国民／国民的）アイデンティティ，エスニック（民族／民族的）アイデンティティ」を同一視する立場には立たず，海外の心理学的な研究例に従って，区別して扱う。日本の研究例には使い方の混乱がみられるので，この点は注意して扱う必要がある。

ここまで「エスニックアイデンティティ」という語の多様な用例をみてきた。以下では，本稿でいう「エスニックアイデンティティ」と「ナショナルアイデンティティ」に含まれる成分を整理していく。

2.4　二文化に関わるアイデンティティ概念の整理

文化間移行者において，滞在先と出身集団に関わるアイデンティティを測定した研究は多いが，その視座を整理しておきたい。まずエスニックアイデンティティについては，海外の移民研究でも日本における在日コリアンの研究でも共通して，主に愛着やプライドといった感情レベルの測定が行われている（Ward, 2006；Gong, 2007；林, 2001）。ただし90年代以前の海外の研究では，感情成分はエスニックに対してのみ測定され，ホストに対しては測定されていないようである。それに対して，近年の海外の研究では，ナショナルアイデンティティとして，滞在先へのアイデンティティを測定する際に感情成分が含まれる。ただし日本ではこうした用例はみられず，海外と日本の研究の間で若干のずれがみられる。なお海外の研究では，感情レベルを含めた多様な測定項目が用いられている（Ward, 2006）。

海外の移民研究の流れをみると，エスニックアイデンティティの重要な心理的要素とされる愛着やプライドなどは，出身集団に対してのみ測定されていた時期がある。しかし今日では，出身集団のみならず，滞在先へのアイデンティティの測定項目にも使われている。例えばニュージーランドに住む

移民の調査では，ナショナルアイデンティティの測定項目として，「ニュージーランド人であることがハッピー」と思う度合が尋ねられている（Ward, 2006）。現在の心理学的研究では，情緒的成分は，二文化いずれのアイデンティティにとっても構成成分とみなされている。

一方，在日コリアンの社会学的な研究の場合は，滞在先への愛着はアイデンティティ研究の文脈ではあまり取り上げられていない。単に愛着を測定したという例はあるが，ナショナルアイデンティティの構成概念としては認められていない。両アイデンティティの構成要素は，対応した項目からは成っておらず，それぞれに偏りのある部分的な測定項目が使われている。例えば林（2001）の在日韓国人を対象とした質問紙調査では，「民族的アイデンティティ」の多様化を分類する目的で，ホストに対しては「帰化願望の程度」を尋ねているし，エスニックに対しては「本国に対する愛着程度」を尋ねている。その背景にあるのは，滞在先に対するアイデンティティは，愛着という情緒的な次元で測るより，帰化（日本国籍への変更）という，外的カテゴリの選択に関わる意志を尋ねるのが適切だ，とする見方であろう。

かつてBerry, Kim, Power, Young & Bujaki（1989）は，民族的特徴を保持したいか，ホスト社会の人々とよい関係を作りたいか，という二つの非対称の問いを使って，文化変容態度の四類型化を試みた。後日，彼等はこれをアイデンティティの四類型とも呼んでいる。

林（2001）は，Berryら（1989）を全く引用していないが，重要と思われる二問だけで分類を行う視点は共通している。心理学領域では，のちに複数項目から成る目録形式で，尺度構成が試みられるようになる。上記のようなシンプルな測定ツールの暫定的適用は，初期的研究に共通する特徴といってもいいかもしれない。わずかな数の問いの選定は経験的な判断によるものと思われ，その妥当性は必ずしも検証されていない。

「日本への愛着」を調べた調査報告（福岡，1997）は存在する。しかしこれはアイデンティティとの関連から発せられた問いではなくて，単に様々な対象に対する「愛着」を聞いたとする報告であった。結果としては，在日韓国人三世ぐらいになると圧倒的に日本への愛着が高くなり，日本社会への帰属意識が高まり，祖国への帰属意識は希薄化する，とまとめられている。これは韓国籍を持って日本に住む人たちの世代間比較という横断調査であり，各世代において，帰化した人が抜けた残りのサンプルを対象としている。従って帰化した人を交えた世代間比較や，縦断調査の結果と同じかどうかは未詳である。いずれにしても，在日コリアンにおいて，滞在先である日本への愛着が皆無ないしは測定の価値のないものとみなす理由は，ないように思われる。

滞在先である日本への愛着も，ナショナルアイデンティティの構成要素として取り上げる意味があるように思われる。上記の福岡（1997）の調査で，韓国籍の在日コリアンにおいて，日本への愛着や，日本での生育地への愛着が一定程度みられていることは，その見方を裏付けている。特に後者の愛着が高いとされ，地域への情緒的反応はより顕著である。ただし愛着という感情が，ホストを対象にしたときとエスニックを対象にしたときでは，異なる心理的ニュアンスから生じている可能性は残る。

近年の海外の流れとは異なり，日本の調査では愛着は総じてナショナルアイデンティティの測定項目として扱われておらず，エスニックへの愛着とホストへの愛着の間の差異を検討する姿勢はみられない。在日コリアンの両集団に対する愛着が持つ心理的機能を探求するのは，今後の課題といえる。

日本においてはなぜ，ナショナルアイデンティティの測定に，愛着という情緒成分が組み込まれてこなかったのか。背景を推測するに，日本社会に対して愛着とは反対の，反感などネガティブな感情が注目されがちであり，肯定的な感情の存在感が薄かったのかもしれない。

海外ではナショナルアイデンティの測定として，愛着のほか，ホスト国の人である程度なども聞いているが，日本では，日本への愛着は日本人であるという意識とは関連が薄くて，ナショナルアイデンティの構成概念に該当しないのかもしれない。日本人というアイデンティティは，もっと外的な枠組み，例えば帰化の選択などでとらえられる概念なのかもしれない。測定してみないと何ともいえないが，基本的な問いは，在日コリアンにおいて日本への愛着は，日本人アイデンティティの構成成分としてどう評価されるのかという点である。これはナショナルアイデンティティに，外的なカテゴリ選択と内的な情緒的反応をどう位置づけるのかという問いでもある。また在日コリアンの，日本人としてのアイデンティティとは何かという問いでもある。研究手続きとしては，質問項目を設定する以前に，在日コリアンの「ナショナルアイデンティティ」の要素を吟味すべきであろう。つまりその構成概念を，質的検討によって探るのが課題である。

海外では，総じて認知・行動・感情をもってナショナルアイデンティティを定義している。しかしアイデンティティを評価する要因として，国籍という外的カテゴリが大きく注目される日本の状況は，何を反映しているのかという問いかけもできよう。これは在日コリアンの位置づけをめぐる，示唆的な問いといえる。

以上をみてきたところで，本研究におけるアイデンティティの定義に，若干の補足を行いたい。本稿では出身集団やその集団の文化へのアイデンティティを「エスニックアイデンティティ」と定義したが，その成分には愛着・プライドなどの感情成分を取り入れることとしたい。そして民族的な習慣や意識などの行動や認知も，加えて考えたい。滞在先の社会や集団への「ナショナルアイデンティティ」も，同様に認知・感情・行動の成分を想定し，地域への愛着や帰化願望を含めて考えることとする。

ここまで，海外の心理学的な研究と比べながら，在日コリアンにおける文化的アイデンティティに関する見方や知見を整理してきた。以下では，その範囲を超えて在日コリアンをとらえる新たな視点の登場に焦点を当てて，研究上の課題を探る。

3．在日コリアンの新たな生き方

3.1　在日コリアンにおける二文化間の心理的葛藤

社会学者の福岡（1993）は，在日コリアンの若者は生き方の二重方向性，すなわち「同化志向」と「異化志向」を持つと述べている。「同化志向」は周りのみんな，つまり日本人たちと同じでありたい，

という志向である。「異化志向」は周りのみんなと違う自分であっても構わない，違う自分でありたい，という志向である。

ここから示唆されるのは，２世以降は日本で生まれ育ったことから，いわば無意識のうちに日本文化にある程度の同化を果たしていること，しかし意識的に母国へのルーツ意識を保持している場合には，二文化アイデンティティを持たざるをえないことである。在日コリアンが，日韓の二文化間で葛藤しているという否定的なニュアンスの報告がしばしば見られる。一方で，二文化に接することを肯定的にとらえた例も，わずかながらみられる。

福岡（1993）は聞き取り調査を行って，在日コリアンが抱いているアイデンティティの葛藤を示すものとして，“どのように生きていったらいいのか，出口の見つからない混迷状態”にある，という語りを紹介している。在日本大韓民国青年会（2010）には，“日本で生まれたのに日本人ではなくて韓国に行っても純粋な韓国人ではなく，すごくコンフューズする感じで，ややこしいなと思いました”とか，“自分の存在は何なのか，何人なのか疑問として悶々と育ってきた”，と語る在日コリアン女性のインタビューが紹介されている。

これらの語りから察せられることは，在日コリアンが，日本人か韓国人なのか両者択一を迫られる環境で育っていること，どちらでもない，いわばぴったり当てはまるカテゴリがない状態であることが，彼らの日本社会における居心地を否定的なものにしていることである。

他国の移民においても，滞在先と出身集団に関する二つのカテゴリのはざまにいることを，否定的に受け止める報告はみられる（Sam & Berry, 1995）。海外の心理学的な移民研究を展望したHaritatos & Benet-Martinez（2002）は，二文化主義（biculturalism）はプライド・独特性・コミュニティの豊かさなどの意味を持つが，一方ではアイデンティティ混乱・価値間の対立の意味も伴うとしている。否定的な面も肯定的な面もあるという解釈だが，在日コリアンにこれが当てはまるだろうか。二つの文化があって紛らわしい，あるいはどちらか一つに決められなくて片方を邪魔に感じる，という混乱だけではなくて，移住先に同化しつつも祖国の価値観や文化を受け継いで，豊かな自己像ができるという考え方は可能だろう。在日コリアンの語りにわずかにみられる，肯定的な自己像を示す語りがそれを示唆している（黒坂・福岡，2008）。

3.2　在日コリアンの存在に対する日本人側のとらえ方

在日コリアンには，二文化の存在は肯定的にも否定的にもなるとするなら，受け入れ側である日本社会の側から，在日コリアンに向けられる視線や態度も，同様に両義的なものなのだろうか。日本社会では，在日コリアンが差別の対象であったとの指摘が多く（森，2002；黒坂ら，2008），総じて否定的な対応が報告されている。福岡（1997）は，在日韓国人青年の成育過程において，被差別体験によって，民族的劣等感が強く内面化されるのではないかと考察している。金（1997）は，差別を受けることで，民族的誇りや個人的誇りが低下することも，かえって高揚することもあるとみている。被

差別から高揚が生じることを示唆するものとしては，“在日であるというアイデンティティが差別の対象になっているからこそ宝にしたい”という語りが紹介されている（森，2002）。被差別が自己表現や主張につながるという考察は，在日本大韓民国青年会（2010）における，“人前で表現したりするのに執着しているのは，在日だからっていうのがすごく大きいと思う。私がもし在日じゃなかったら歌ってないかもしれない”との語りに見られる。

上記をみて気づくことは，心理的過程を論じているわりには心理学者による探求が希薄で，確かな証左に乏しいことである。ただ，在日コリアンというカテゴリが差別の対象となっているからこそ，総じて自己防衛的になっている，という推測はできるだろう。その反動として集団レベルでも個人レベルでも誇りを高く持ち，社会的圧力を意識するが故に，個人レベルでの自己表出の動機付けが高まる，という見方も，あり得る解釈だろう。

海外の心理学的移民研究では，差別と自尊心の間に正の相関関係を報告したものが多い（例えばWiley，Perkins，& Deaux，2008；Berryら，2010）。アメリカの心理学者Wileyら（2008）は，序論でidentification，グループ評価認知（perceived group evaluation）と自尊感情間の関連について展望し，研究例を二つ紹介している。一つは，アフリカ系アメリカ人に関する研究である。アフリカ系アメリカ人は，偏見やホスト社会からの拒絶を感じてwell-beingに否定的影響を受けるが，このような否定的な影響は，エスニック・グループに同一視することで和らぐとされている。もう一つは，ラテン系アメリカ人に関する研究である。集団の不利（group disadvantage）は個人の意識をエスニックアイデンティティに集中させ，グループに帰属することで自尊感情も高くなるとされる。この二例とも，被差別感を感じることによってエスニック集団への注目が高まるという。この場合の所属集団は，自己防衛の手段としての心理的な機能を備えているといえる。在日コリアンにおいては，差別，自尊心，エスニック集団の自己防衛の機能などの心理機制を，詳細に解明した心理学的な調査研究がない。それらの関連についてはまだ推測の域を出ておらず，検証が課題である。

4．「個人」・「自由人」としての生き方

4.1　個人を軸にしたアイデンティティの捉え方

在日コリアンの差別体験とアイデンティティの関連を考えていく場合，証左には乏しいが，以下の推測はできよう。かつては今より社会的な差別が明確で，その頃は在日コリアンという集団カテゴリを，いわば盾にして差別的な日本社会からの防衛を図っていた。そのため，エスニックアイデンティティも比較的強かった。翻って近年は，在日コリアン以外にも異文化圏からの移入者が多数滞在するようになり，日本社会の多文化化が進みつつある。日本社会の構成員の世代交代が進み，戦後に比べれば差別は弱まってきた。そこで在日コリアンも集団への依存が弱まったり，コリアンのカテゴリへのこだわりが弱まったりするかもしれない。所属集団が自己像に大きな存在感を持っていた時代とは異なり，自分の特徴で自らを語りたいという，抑圧からの反動のような欲求が生じても不思議ではな

い。そうなれば，与えられたカテゴリに自分を当てはめるという自己規定の仕方ではなく，自分の選択によって自己の存在のあり方を意味づけ，ありのままの自分を表出し，自然のままの自分でいたいと願うようになるかもしれない。こうして外側から自分にラベルを貼ることなく，内側からわき出るもので自分を示したい，つまり主体的で積極的な選択のありようによって自らを語り，自分の存在そのものに意味があると信じる生きかたが登場してくる余地ができてくる。そうなれば，エスニックアイデンティティに代って，個人のアイデンティティが注目されていくと予想される。

森（2002）は，卒業後，外資系の会社で働いた時，欧米人と接することについて，“すごく気持ちよかったのは，私を個人として見る”からだという，在日韓国人の語りを紹介している。この語りは，個人が注目されることに心理的な解放感を感じることを示している。そして在日コリアンが，かつてより集団カテゴリにこだわらぬ生き方を持つようになっており，個人を軸にしたアイデンティティのとらえ方が，かつてより現実味を帯びてきたことを示唆している。

4.2　民族的カテゴリより上位の枠組みを用いたアイデンティティのとらえ方

個人のアイデンティティが注目されるに至った背景は，他にも想像できる。原尻（1989）は，日本にも韓国にもぴったり当てはまるカテゴリがないと思う在日コリアンは，帰化したあとも，朝鮮人でもないが日本人でもないと感じ，「自分は何ものか」という疑問を持つという。そこで社会の周辺的な人間，いわゆるマージナルマンであることで，返って「コスモポリタン」や「自由人」を標榜するようになる人たちがいるという。

この発見は，帰化をしても自分を日本人と称することが妥当と感じられない場合に，どちらのカテゴリでもない，新たなカテゴリを作りだすことを選んで，“自由人”という第三の存在のありようを創出するという選択肢の登場を示唆する。ただし上記は心理学的な調査ではなく，構成概念や他のカテゴリとの異同が詳しく分析されているわけでもない。新たな生き方を多くの人が本当に持っているのか，理念としての提唱に過ぎないのか，あるいは自己の存在の仕方への単なる比喩表現なのか。日本人でもなく韓国人でもないと感じる在日コリアンが，自己を「個人」や「自由人」と表することは，どのような生き方と結びついているのか。具体的にはどのような行動を指すのか。まだ実証的研究が少なく，実態の把握を進めることは，今後の課題である。

本稿ではとりあえず，集団カテゴリにこだわらなくなった生き方を「個人」や「自由人」と想定して，集団カテゴリや束縛から自由でありたいという志向性を持つものとして，緩やかに定義しておく。以下では，その存在を示唆する手がかりを眺めていくこととする。

4.3　個人を軸にした生き方に関する日本の社会学的な実証研究

在日コリアン対象の実証的研究の中には，新たな生き方の存在を示唆する研究例が見つかる。福岡（1997）は，質問紙調査によって，日本生まれで，韓国籍を持ち，18歳から30歳までの韓国籍の青年

800人の生き方を調べた。先行研究である福岡（1993）の聞き取り調査から，在日コリアンには7タイプの生き方，すなわち「個人志向型」と他に「祖国志向型」「共生志向型」「葛藤回避型」「葛藤型」「帰化志向型」「同胞志向型」がある，との仮説をたてた。調査では，7タイプの名称を簡単な説明と共に調査協力者に呈示して，当てはまると思うタイプを複数選択してもらった後に，単一選択を依頼し，最後に生き方に関する質問に答えてもらっている。「個人志向型」は，「自分自身が社会的に認められるように，自己実現を成し遂げること」と説明されている。分散分析の結果，単一回答で「個人志向型」を選んだ人は，他の回答者より「権威主義」「集団同調性」が低く，同胞の友人数が少なく，学歴が高かった。これを，世間体に縛られることなく生きていこうとしている，同胞から独立したところで自分の生き方を追求している，個人的成功を追求している生き方だ，とまとめている。この報告は示唆的ではあるが，心理学的研究の視点から見ると残された問題は多く，手続き的にみると次の四点が指摘できよう。

第一は，質問項目の信頼性と妥当性の検討がないことと，７因子を想定した分析や，因子数を指定しない場合の因子分析の結果の記載がみられないことである。第二は，カテゴリの独立性が検討されておらず，個人の反応やプロフィールに基づく回答者のタイプ分けが試みられていないことである。第三は，生き方を評定する前にタイプの選択を求めていることから，回答がゆがむ可能性が否定できないことである。第四は，同胞の友人数が少ないことを，個人主義的なパーソナリティのありようが見えると表しているが，日本人の友人数は多いとされているので，同胞の友人数が少ないことをもって個人主義というには難があること，個人主義的な価値観の測定は行われていないこと，心理的なパーソナリティ変数の測定を欠いたままパーソナリティを論じていることである。

林（2001）は韓国籍を持つ20歳以上の576名を対象に，質問紙によって「本国への愛着」と「日本への帰化願望」を尋ね，「愛着を非常に感じる・かなり感じる・どちらともいえない・あまり感じない・全く感じない」，「帰化をぜひしたい・できればしたい・あまりしたくない・全くしたくない」を選択してもらっている。この分析では，「愛着をあまり／全く感じない，帰化をあまり／全くしたくない」回答者を「個人志向」としている。χ^2検定を行ったところ，この人たちの傾向として，韓国語がほとんどできなかったという。また他の回答者よりも，通名を使い，民族教育を受けたことがなく，自分の子供に民族教育を受けさせたくないと考え，日本人の友人が多かったという。そこでこの人たちを，民族意識の受容が低いと判定している。なお彼等と同じく愛着はあまり／全くないが，帰化はぜひ／できればしたいと答える点が異なる者は，「帰化志向」とされている。同じ検定方法で，この人たちの民族意識の受容も，より低いとされている。因子分析は行われておらず，細かい分析もみられないが，「帰化志向」と「個人志向」において，帰化願望の有無以外は共通性が高いと記しており，あまりはっきりした結果とはいえないかもしれないが，民族意識が低い者の中には，帰化したい者（帰化志向）としたくない者（個人志向）がいる可能性が示唆されている。言い換えれば，民族意識が低い者の中に，帰化の選択という点で下位分類が存在するかもしれないということである。

民族意識が低いからといって自動的に帰化を望むわけではないらしい，という点は興味深い。なぜこのようなことが起きるのか。ルーツだけは大事に思う気持ちがあって，帰化したら本来の自分がなくなると感じるからか。自分が自分でいる感覚や自分らしさの感覚は，国籍といかなる関係にあるのか。帰化の持つ心理的な意味はまだ十分解明されておらず，在日コリアンの帰化を心理的に論じる知見の蓄積は不十分である。

上記の林（2001）の調査では，民族的アイデンティティを分類する意図で，日本への帰化と母国への愛着，二項目が尋ねられた。しかしこの二項目で民族的アイデンティティが測れるのか，測れるとしたらどの側面をはかっているのかは論じられておらず，検討もされていない。また愛着と帰化願望のないことが，個人を志向することと同義かどうかは疑問が残るが，その点も検討がない。従って呈示された情報からは，個人志向という名称の妥当性を確かめることができない。

個人志向という生き方が実在するのか，するとしたらどのような特徴をもって描き出せるのかは，より詳細な分析が必要であろう。例えば，個人的な価値観を持ち，個人単位の行動をとるかどうかを尋ね，帰化願望の有無やエスニックな習慣の保持なども測定し，要因間の関連を検討していくのは一案といえる。

4.4 「個」に注目する三つの生き方：民族脱却型，超越型，個別性重視型

これまでの日本の社会学的論考を眺めた限りでは，在日コリアンの新たな生き方として，主に自由人や個人という言葉で，個への注目が取り上げられている。これらを広い意味での個人志向ととらえるなら，概念構成から大きく分けて，以下の三つが仮説として想定できるように思われる。

一つ目はエスニックな文化集団にこだわらないという姿勢を持つ，「民族脱却型」といってもよいタイプである。例えば福岡の聞き取り調査（1993）や質問紙調査（1997）に，そのような解釈例を見ることができる。福岡（1993）が聞き取り調査から見いだしたとする「葛藤回避型」の特徴は，無意識的に日本人の世界にも同胞の世界にもすっと適応する人たちである，と説明されている。彼等はスイッチング・メカニズムを身につけている，と考察されている。また「帰化志向型」とされた人たちは，“日本国籍になることで日本人になれると考える”人たちだと書かれている。上記二群の人たちは，共にエスニックにこだわらないという共通点がある。この分類は十分に妥当性が検証されていないので，仮説に留まるものではあるが，エスニックにこだわらないことで，国籍が日本になってもかまわないと考えるようになったり，日本社会に合わせて日本人らしい対応を繰り出すようになったりする，という可能性は示唆される。つまりエスニックな文化集団にこだわらない人は，総じて同化の方向をたどるが，それを行動面での同化で表現するか，帰化で表現するかで，選択が分かれるのかもしれない。先に，帰化願望の肯定や否定は民族意識の低さからだけでは説明できない，とする見方を述べた。あるいは帰化は，何か心理的に独特の選択なのかもしれないが，解明は不十分である。加えてホスト志向の生じる条件も，未詳である。エスニックへの拘泥が低ければホスト志向が高まる，あるいはホ

スト志向の強さはエスニック志向の低さによる，という可能性は考えられるが，ホスト志向の向上はどのように起きるのか，さらに帰化との関連はどういうものなのかは，解明されていない。

二つ目は，属性を超えたカテゴリを想定するとらえ方である。「超越型」といってもよいだろう。辻本ら（1994）は在日コリアンに「生き方」に関する自由記述を求め，中学生から“韓国人として生きるよりも人間として生きたい”とか，“何人は止めて，地球人にしよう”，との記載を得たという。原尻（1989）は，在日朝鮮人のエスニック・バウンダリーの変容において，「自由人・国際人・その他」で自分を認識する人たちが増えている，との印象をその著書で述べている。これらの国際人，人間，地球人，自由人のようなカテゴリは，日本と韓国という属性を使わない自己規定である。

上記はどういう存在として生きたいかを尋ねられたときに，理念として答えた内容だったり，自分を捉える枠組みについて，実体が薄くなっているとみる論考として呈示されたりしている。つまり自分の存在の仕方についての願望ないしは自己呈示，自己表現といってもよいかもしれない。こうした比喩や自己呈示として解釈していくなら，この語を使うことに何らかの心理的機能があると解することもできよう。

三つ目は，個人をベースにした価値観を重視し，総じて個を単位とするという考え方である。「個別性重視型」といってもよい。福岡（1997）や林（2001）は，努力次第で自分の人生を切り開けると信じ，個人的な成功を望む在日コリアンを表現する際に，「個人志向」という言葉を用いている。個人を単位に，自らの主観や価値観を重視する，個人中心の生き方といってもよいだろう。ただし韓国や日本という属性による集団カテゴリよりも，個人のありように注目してほしいという希望とみるなら，超越型と似た意味合いがあるかもしれない。

上記の三つの概念は，民族的カテゴリをもって自分を語ろうとせず，すべて，個に焦点を当てた生き方であることに共通している。しかし，民族脱却型は，従来のくくり方を否定しただけで，代わりに明確なカテゴリを掲げているわけではないので，実態はつかみにくい。民族的カテゴリにこだわらないという姿勢は持っているが，その先に何を志向するかを積極的に打ち出しているわけではなく，何を目指すかという点での印象は消極的にならざるをえない。だがエスニックにこだわらないことから，ホスト寄りの選択に自ずと合流していき，それが帰化志向やスイッチング傾向として把握された，という推測はできるだろう。ホスト社会の中に生きるという環境において，あらがう意志が特になく，川の中で流れに抗せずにただ流れに乗っていくがごとく，周囲にあわせる方へ自然に進んだと感じているので，強い意志や確たる方針に導かれての同化ではない。同化しようという意欲を伴う同化を積極的同化とすれば，自然な同化は消極的同化といってもよいかもしれない。積極的・消極的な同化が，心理的にどう区別されるのかは，今後の課題である。

一方で，上記のいずれの同化においても，その個人の中でルーツが保たれているか否か，という下位分類をさらに想定することもできるだろう。ルーツを保った同化と，ルーツを希薄化させた同化である。ではこれらの同化は，細かくみたときに何が異なるのであろうか。これも今後の検討点といえ

るだろう。

超越型と個別性重視型は，民族的カテゴリにこだわらない点では，民族脱却型と共通している。ただし日本人や韓国人というカテゴリに依らないという以外に，生き方としての代替案を掲げている点で，より積極的な提案といえる。何を志向するかは，自らの選択に基づいて選択するもの，と捉えている。これら二つの生きかたは，民族的ルーツのみでなく，住んでいる社会にもこだわりは少ない。ただし生き方という表現は使われているが，生きる姿勢や理念としての抽象的な概念に留まるのか，実体のある生き方かは未詳である。

本稿では，民族的カテゴリと移住先のカテゴリ両方にこだわりの薄い，ないしは両方を否定した生きかた（実態ないしは理念）を，脱カテゴリ的な生き方と定義しておく。その下位分類には，超越型と個別性重視型が想定できる。これら二つの概念について，超越型を「自由人」的な生き方，個別性重視型を「個人」的な生き方として仮に区分した上で，以下に論を進めていく

4.5 「個人」と「自由人」の捉え方の違い

上記の定義を使うなら，「個人」と「自由人」では個人ベースの自己認識は共通するが，自分を捉える範囲の視点が異なっている，という特徴付けが可能だろう。

まず「個人」としての自己認知は，ミクロレベルから自分をとらえている。つまり個人の特性をもって自分をとらえ，他者もその見方を共有してほしいと主張する。ここに該当するのは，総じて個人的な成功を達しているあるいはそれを目指している人々である，という見方がある。福岡（1997）は在日韓国人を対象とした質問紙調査から，「個人志向型」の顕著な特徴は「学歴」の達成水準がもっとも高いことだと報告した。そして，個人的努力しだいでなんとか自分の人生を切り開いていくことを目指し，一流大学へ入るか，外資系や日本の大企業への就職を果たそうとする人々が多い，と記した。この人たちはエスニック集団の後ろ盾を持たなくとも，社会的に評価されたり，活躍の場を持っていたりする人たちである。言い換えれば，個人の能力や活動によって，自尊心を保てる状態にある。かつての差別的な社会では，エスニック集団は自尊心を維持する機能を持っていたというが（福岡，1997；森，2002），社会的な差別が弱まったことから，今はエスニック集団に依存する必要も弱まったのかもしれない。そこで個々人の生き方に注目するようになった，という解釈はできるだろう。この意味では，「個人」としての脱カテゴリ的な生き方は，自尊心を保つための方策や選択肢が増えた結果なのかも知れない。

しかしこの考えでは，住んでいる社会のカテゴリにも依らないことの説明は必ずしもつかない。ホスト集団のカテゴリと，エスニックなカテゴリには，その発生・維持の機序や，自尊心などに関わる心理的機能が異なることが考えられるが，その詳細の解明は今後の課題だろう。

次に「自由人」としての自己認知は，マクロレベルから自らをとらえている。より大きなカテゴリをもって個人を表することで，集団間の差異を無視または矮小化しようとしており，差異の重要性を

低下させているという解釈ができるだろう。李・佐野（2010）は中国帰国者三世を対象とした面接調査で，“自分は何人ですか？”との質問に「国際人」と答えた人が，“国際化が進めば，いつか国境線がなくなる”と語ったと述べている。

今後社会のグローバル化が進み，国家間や集団間の境界線がより意識されなくなれば，在日コリアンを取り巻く韓国人・日本人というカテゴリの影響力も相対的に弱まるだろう。今の「個人」は，個人的な成功を条件に，個人としての生き方が貫けた人たちを指すのだとしても，よりグローバル化した時代にあってはより多くの人が，よりカテゴリを意識せずに生きているかもしれない。「社会が変わったから，こだわる必要がない」と「自分が成功したから，こだわる必要がない」の違いが，そこには予想される。

これらを仮説化するなら，脱カテゴリ的な生き方ができる場合は以下の二つとなる。一つ目は，グローバル化の波の中で，住んでいる社会がより多文化社会となり，一般的なホストと異なることがさほど珍しいことではなくなったときである。二つ目に，マイノリティ集団に属する個人が，個人的成功を背景に，集団への依存がなくても自尊心が保てる状態になったときである。「自由人」を標榜することには，カテゴリの重要性が低下した社会の到来を希求する姿勢が反映されており，「個人」を標榜することには，集団カテゴリを要さない，または頼らない自分になりたい，という願いが反映される，という見方もできるだろう。

自分には両方とも当てはまると考える例もあるかもしれないが，その場合はカテゴリからの脱却を，社会にも自分にも願っているといえよう。また「個人」と「自由人」の言葉は，必ずしも明確に使い分けられていないかもしれない。使い分けの実際や，片方の選択と両方の選択の違いの解明は，今後の課題である。

本稿では「個人」や「自由人」として表現される生きかたの概念化を整理してみたが，解けない疑問がいくつか残る。一つ目として，「個人」や「自由人」的な生き方は，本当に自発的な言葉として語られたのか。それとも集団カテゴリをもって自己規定をしたくない人が，その拘束を脱したい願望の表現として，他の選択肢を指した可能性はないのか。理念的な表現を巡る心理的機制は，解明が期待される課題といえる。二つ目として，「個人」や「自由人」的な生き方をする人たちは，所属集団とはどのような関係にあるのか。人は現実的にはどこかの集団に所属しているはずであり，脱カテゴリ的な生き方を掲げる人が，各集団とどの程度の関わりを持つのかは，興味深い課題である。例えば「個人」や「自由人」的な生き方の度合いと，韓国人カテゴリや日本人カテゴリの実感の間に，正や負の相関があるのかどうかなどは，調べてみる価値があろう。

4.6　在日コリアンの文化的アイデンティティに関する研究課題

ここまでみてきたように，文化的アイデンティティは在日コリアン研究においては関心を持たれてきたが，まだ解明は不十分であり，かつ心理学的に興味深い研究主題が浮かび上がってくる。以下に

それを今後の課題として整理しておきたい。

在日コリアンの生き方については，文化的アイデンティをどう選択するかに関心が寄せられてきており，主に民族的アイデンティティという語を使って探求が進められてきた。そして二つのアイデンティティを一つまたは二つ選ぶ生き方以外に，いずれも希薄な「個人」や「自由人」といった新たな標榜が話題になってきている。一方，海外の移民研究では，二文化間での文化的アイデンティティをめぐって，一次元モデルから二次元モデルへの変遷がみられ，いわゆる四類型の分類は，四種類の想定への当てはまりを測定する方法と，二軸の得点を組み合わせて判定される方法が開発されてきており，それらとメンタルヘルスとの関連が調べられている。

日本と海外の研究の流れを念頭に置いて，在日コリアン研究における心理学的探求の課題を挙げるなら，第一に，文化的アイデンティティをめぐっての，心理学的手続きを踏んだ測定が求められる。これまでの日本の研究例では，在日コリアンの民族的アイデンティティは，分類の提案はあってもその検証は不確かだった。民族的アイデンティティとは何か，それは何をもって定義されるのかという議論を，十分に行うことが課題である。既存の四類型を利用するか，別の枠組みを用意するのかは，選択の余地がある。第二に，新たな選択肢とされる生き方を明確化することが課題である。具体的には，質的手法を経て概念構成を明らかにすること，そして操作的定義を定めて，量的手法によって実態を把握する実証研究を展開し，その一般性を確かめていくことが必要だろう。新たな概念をたてられるなら，それらと従来の四類型との関連も調べる必要があろう。第三に，四類型や新類型（個人や自由人）と，メンタルヘルスとの関連を，心理的な変数間の関連として調べていくことが発展的課題になろう。在日コリアンの生き方やアイデンティティ面と，メンタルヘルスとの関連を調べた実証研究の蓄積は少ないが，心理的な観点から評価する際には，この点の検討は不可欠と思われる。個人や自由人は新たな生き方として期待されているが，メンタルヘルスは良好なのか。

海外では，心理学的な観点からの移民の適応研究が蓄積されている。四類型の一つである「周辺化」の得点が，うつの予測要因（Samら，1995）であったり，心理的ストレスの予測要因（Khrishnan & Berry，1992）であるなどの報告がみられる。だがこうした現象が，在日コリアンや在日外国人の長期滞在者でみられるのかどうかは，解明が進んでいない。海外の移民研究との対応を見極めていくためにも，こうした基本的な視座に基づいた実証研究の蓄積が待たれる。

5．まとめ

本稿では，在日コリアンにおける文化的アイデンティティの様相と新たな生き方で提唱されている「個人」や「自由人」について，まとめてきた。上記で指摘してきた課題を解決していくには，以下のような発展的な研究が求められていると考えられる。

第一は，在日コリアンにおけるナショナルアイデンティの明確化である。ナショナルアイデンティティという用語の解釈を巡っては，海外の研究と日本の研究の間にずれが見受けられた。海外では滞

在先へのアイデンティティを指す一方で，日本ではルーツと関わるアイデンティティを意味している。在日コリアンの場合，滞在先である日本に対して抱く意識や感情を表現する的確な用語は何で，それをナショナルアイデンティティとして解釈するにはどのような定義が必要になるのか。ナショナルアイデンティティの捉え方や概念の範囲について掘り起こしていくには，質的手法による探索が不可欠であろう。仮に在日コリアンが二文化のアイデンティティを持つとしたら，日本人アイデンティティとよばれる方のものは，何によって決まるものかという解明も必要であろう。例えば，帰化すなわち日本国籍に変えることがその意識の発生を促すのか，それとも帰化はしていなくとも日本への愛着が強くあればそれは促されるのか。滞在先へのアイデンティティが何を意味するか次第でこうした答えも変わってくるだろう。

第二は，在日コリアンにおける国籍が持つ意味の明確化である。「民族意識」が低い在日コリアンの中には，帰化肯定群（日本国籍）も帰化否定群（韓国国籍）も含まれる。つまり国籍と民族意識は関連がないという可能性もある。だとすれば，韓国国籍だからといって民族意識が高いわけではないということにもなる。既成の民族集団に拘らず自由に生きていきたいと思う個人が，必ずしも韓国籍に固執しなくなるわけではなく，国籍にだけはこだわるという場合もみられる。この場合，国籍は心理的にどういう意味をもつものとなっているのか。自分が韓国人であるという自己主張の手段だったり，生活実態を伴わない象徴的な記号であったりするのかもしれない。実際の韓国人としての生活形態を保つことと韓国籍を持つことは，質の異なる心理的選択なのかもしれない。

第三は，自由人的な生き方の実態の明確化である。「個人」や「自由人」は，本当に積極的で自発的な選択であり生き方であるのか。それとも日本人や韓国人であることを否定したい思いから，どちらでもないという意味で「個人」や「自由人」を標榜するのか。そもそもこれらは，実態のある生き方なのか，それとも自己呈示の方策の一つであり，自分の存在をどう表象するかを巡っての心情的な選択なのか。もし象徴的な意味合いから解釈するのが妥当な語であるなら，国籍が生活実態というよりは象徴的な自己呈示であるとの解釈と似た発想といえるかもしれない。在日コリアンにおいては，象徴的に自分を呈示する用語と，実態に基づいて自分を形容している用語とを，心理的な自己表象として区別して考える必要があるように思われる。

【引用文献】

Berry, J. W.（1980）. Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla（Ed.）, *Acculturation：Theory, models and some new findings.* Boulder, CO： Westview Press. pp.9－25.

Berry, J. W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M.（1989）. Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology： An International Review*,38, 185－206.

Berry, J. W., & Sabatier, C.（2010）. Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural*

Relations, 34, 191－207.

Gong, L.（2007）. Ethnic identity and identification with the majority group： Relations with national identity and self－esteem. *International Journal of Intercultural Relations*, 31, 503－523.

原尻　英樹（1989）. 在日朝鮮人の生活世界 弘文堂

Haritatos, J., & Benet － Martinez, V.（2002）. Bicultural identities： The interface of cultural, personality, and socio－cognitive processes. *Journal of research in personality*, 36, 598－606.

福岡　安則（1993）. 在日韓国・朝鮮人――若い世代のアイデンティティ―― 中央公論社

福岡　安則・金　明秀（1997）. 在日韓国人青年の生活と意識 東京大学出版会

Khrishnan, A., & Berry, J. W.（1992）. Acculturative stress and acculturation attitudes among Indian immigrants to the United States. *Psychology and Developing Societies*,4,187－212.

金　明秀（1997）. 在日韓国人の社会成層と社会意識全国調査報告書 在日韓国青年商工人連合会

黒坂　愛衣・福岡　安則（2008）. 越境する「在日の苦難」――日本名でアメリカ国籍になった在日コリアンからの聞き取り―― 日本アジア研究, 5 ,107－130.

林　一圭（2001）. 在日韓国人の生活と意識に関する研究――岡山県内在住の在日韓国人を中心として―― 岡山大学大学院文化科学研究科博士学位論文.

李　原翔・佐野　秀樹（2010）. 中国帰国者三世の文化的アイデンティティの形成について 東京学芸大学紀要（総合教育科学系）Ⅰ,61,185－193.

マツモト, D. 南　雅彦・佐藤　公代（訳）（2001）. 文化と心理学――比較文化心理学入門―― 北大路書房

森　真弓（2002）.「同化」ではなく「共生」を――在日コリアン・アイヌ民族・沖縄の女たちから学ぶ―― 北星学園大学経済学部北星論集,42,57－72.

大西　晶子（2001）. 異文化感接触に関する心理的研究についてのレビュー 東京大学大学院教育学研究科紀要,41,301－310.

Sam, D. L., & Berry, J. W.（1995）. Acculturative stress among young immigrants in Norway. *Scandinavian Journal of Psychology*, 36, 10－24.

谷　富夫（2002）. 民族関係における結合と分離 ミネルヴァ書房

Ting-Toomey, S., Yee-Jung, K. K., Shapiro, R. B., Garcia, W., Wright, T. J., & Oetzel, J. G.（2000）. Ethnic／cultural identity salience and conflict styles in four US ethnic groups. *International Journal of Intercultural Relations*, 24, 47－81.

辻本　久夫・李 鍾順・殷 宅基・岡本 洋之・金 泰泳・金 孝・近藤 とみお・洪 浩秀・森木 和美（1994）. 親と子が見た在日韓国・朝鮮人白書：在日韓国・朝鮮人と日本人の三つの意識調査 明石書店

植松　晃子（2010）. 異文化環境における民族アイデンティティの役割――集団アイデンティティと

自我アイデンティティの関係―― パーソナリティティ研究,19,25－37.

Viruell-Fuentes, E. A.（2007）. Beyond acculturation： Immigration, discrimination, and health research among Mexicans in the United States. *Social Science & Medicine*,65,1524－1535.

Ward, C.（2006）. Acculturation, identity and adaptation in dual heritage adolescents. *International Journal of Intercultural Relations*, 30, 243－259.

Wiley, S., Perkins, K., & Deaux, K.（2008）. Through the looking glass： Ethnic and generational patterns of immigrant identity. *International Journal of Intercultural Relations* , 32 , 385 － 398.

在日本大韓民国青年会（2009）. Annyong Interview あんにょん, Vol.36,2－7.

在日本大韓民国青年会（2010）. Annyong Interview あんにょん, Vol.38,10－16.